





三

海音寺  
潮五郎  
全集

海音寺潮五郎全集 第三卷

海と風と虹と

全二十一卷・第十八回配本

九〇〇円

昭和四十六年三月二十日発行

著者 海音寺潮五郎

装幀 芹澤銑介

口絵 中尾進

発行者 角田秀雄

印刷所 凸版印刷

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

目次

海と風と虹と

海と風と虹と

昭和四十年一月一日—四十一年九月三十日「週刊朝日」

哲学と実技テクニク

とうに夜が明けていることは知っているが、ねむ気が去らない。女が起き上って、しのびやかに朝の身じまいをしていることも知っているが、目があかない。うつらうつらと半睡半醒はんすいはんせいの境をたどりつづける。たどりながら、考えている。

(男はおなごといつまでも一緒にいることは出来ません。

しばらく一緒にいると、胸の底にむずむずと動き出してやまんものがある、どうしても飛出して行かんとおられなくなる。ところが、おなごは反対だ。いつまでも一緒にいたがる。いつまでも男を側に引きとめておきたがる……。

こうまでたがいの性質がちがうところを見ると、男とおなごの仲は、しょせんは争いじゃな。争うたあぐく、男が本来の性質に従うて、おなごの側から飛立つて行くか、おな

ごに負けて側にへばりついているか、するよりほかはないということになる。——ふうむ、こりやおもしろい。なかなか深遠じゃぞ。こんど、氏忠老に語って見よう。前人未

発の見じゃというて、おどろくかも知れん……)

ここまで考えた時、ほぼ平均に保たれて来た睡気すいきと醒気せいきの均衡がやぶれ、はつきりと目がさめた。

せい一ぱいののびをして、大あくびした。  
「お目がさめました」

女はやさしく声をかけた。

「ああ、よく寝た。今日はこう寝坊してはならんのであったに、寝心持のよいままに、寝すごしてしまった。大方、もう辰(午前八時)の刻をまわっているでありますしょうな」

さわやかな声で言つて、起ち上った。声のさわやかさは、十分に寝足りたからでもあるが、哲学を早速に実行に移す心づもりがあるからでもある。衣桁いこうに手をのばし、かかっている着物を着にかかった。

女は、鏡とさしかけていた紅皿べにざらをおいて、あわてて立つて来て、男の手から狩衣かきうを受取つて、ふわりと背に着せかけた。

「お食事がすむまで、おくつろぎのままでおよろしいのに」

ちよいと鼻を鳴らし気味に言う。

二十前後、小がらなからだつきと、初々しい顔つきをしている。家格になつてゐる官位をきわめつくしたところで、従五位下、陰陽頭おんようがしらにしかねない下級公家の姫君にしては、品のよい美しさがある。

「その食事をしているわけに行かんです。こう遅くなつては、どもならん。よっぽど遅うなつてしまったのですわい」

帯をしめ、ゆがんだ立烏帽子をただし、枕べから中啓をひろい上げた。今にも、そのまま辞去しそうだ。

「あれ、まあ！ 今朝はもうご一緒に食事は出来ないのをごさいますの」

と、姫君はおどろいた。顔色がかわって、今にも降り出しそうになった。

「ついついお側に三日いました。のっぴきならん用がさしせまって来ました。もう、供の者がまいるはず」

「今日は、お朝食のあと、父がお目にかかりたいと申していましたのに」

姫君は思い切り悪く言う。こちらは、出来るだけさらさらと言う。

「そうでしたか。しかし、いたし方ありません。頭の殿には、よろしく申しておいて下さい。なに、四、五日中には、まいりますよ」

哲学を案出するのはわけはないが、実行にうつすには相当技法がいり、強い意志がいる。

そこに、待ちかねた、供の者が迎えに来たと、小女が知らせて来た。

「よし。すぐ行くと申してくりやれ」

腰をあげて、つかつかと姫君に近づき、抱きおこして立たせ、両頬と両脛とに軽く口づけし、最後に唇と舌とをちぎれるばかりに強く吸っておいで、すたすたと歩き出した。

強烈な口づけに、姫君は目の前がくらくらとなったのであろうか、目をつぶり、呼吸をあえがし、そこに居くずれていた。

迎えに来たのは、十五、六の少年であった。紅い水干を着て、素足に草履をはき、童形の髪は根元をくくって、背中に結び下げにしている。主人の刀を柄をつかんで、さかまに肩にかついていた。栗丸というのがその名だ。

栗丸の名は、その顔立ちからつけられた。日やけした色がそっくりである上に、上部がせばまり、下部がひらいたところが、その実をへたを下にしてすえたに似ているからだ。国許で、奉公にまかり出た日、純友がつくづくと見て、笑い出し、

「われは栗そっくりな顔をしとるのう、これから栗丸と呼ぶ。そう心得い」

と、申渡したのだ。それから四年の間、ずっとそう呼ばれているので、本名は自分も大体において忘れた。大体において忘れたとは妙な言い方をするが、本名で呼ばれたら、相当まごつき、とっさには誰のことかいなと思うに相違なからうからだ。

純友はこの栗丸を従え、午前八時頃の、よく晴れた、秋の陽をひたいに浴びながら、真直ぐに河原に出た。

彼の歩きぶりには、顕著な特徴がある。はばひろく、分厚い肩をゆすり気味に、大腿に歩くのだが、その足どりは

いかにも軽やかで、しなやかで、弾力的だ。猫属の巨獣の歩きぶりのように、野性的でもあれば、優雅に見えるところもある。京の公家衆には見えない歩きぶりだ。公家衆は最もすばやい変化を秘めて見えるこんな歩きぶりは野蠻な武士のものとしてきらいだ。といって、東国武士のものと違う。騎馬でばかりいる東国武士の足は内側に曲つていて、歩行ぶりはいささか不器用なようにさえ見える。純友のそれは西の国の、それも船に乗りなれた瀬戸内海の島々や、その周辺の国の武士のものであった。

顔立ち、太い眉と、かがやきの強い爛とした目と、隆い鼻筋と、やや分厚な唇と強い意志的な口もとを持ち、口ひげとあごひげがある。さして濃いひげではない。鼻下のは真中がややあいており、あごのはちゃんぽりと短くとかつて、なんとなく好色的な感じさえただよわせている。年は、そうさな、二十四、五、ひよつとすると七、八になっているかも知れない。

全体として、特別そう大きくたくましいのではないが、見かけは大きく、たくましく、堂々とした感じであった。

河原の草は黄ばんで、向う岸に乞食小屋がならび、数人の乞食の姿が見え、音を立てて流れている浅く清らかな川には、水蒸気が立ちのぼっていた。

純友は真直ぐに水際まで来て、ぎぶぎぶと手を洗い、口をすすぎ、顔を洗った。つめたくて、よい気持であった。

ふところから、白い麻布を引出し、ぬれた手や、顔や、

首筋を、ごしごしと拭きながら、日輪にむかつて拍手し、さらに川上の賀茂の森に向つて拍手、拝礼した。

そうしていながら、ぶつぶつと述懐していた。

「おなごと寝ている時、思いもかけん知恵が湧くところがあるので、三日三晩、居つづけてみたが、思いつくところはなかった。しかし、別段いそぐことはない。河岸をかえてみよう。しかし、こんどは誰のところへ行くかだ……」

ともかくも、一応帰宅して、食事して、それからのことだと、河原を下つて少し行つたあたりで、つい足もとの一きわしげつた草むらの中で、むくむくと人の動くけはいがしたかと思うと、袴の裾に近く、きたない手のひらがぬつとあらわれて、ひょこひょこことしゃくつた。何かのつてくれと頼んでいるようにも、行きすぎようとするのをとめているようにも見える、手のひらの動きだ。

もつとも、純友はおどろく色はない。立ちどまって、しげみの中を凝視して、

「誰じゃ」

と、低く言った。

「へへへへ、へへへへ」

いやしげな、愛想笑いとともに、ぼろぼろのものをまとつた、垢だらけの乞食が這い出して来て、足もとにうずくまつた。

見おろした。

「何かおもしろい話があるのか」

「へえ。ちよつこら、おもしろい話がごわかります」

乞食のよごれたひたいには、半ば髪に蔽われて古い刀創のあとが赤黒く光りながらなめに走って兇悪な感じの人相になっているが、純友は氣にしている様子はない。

「言ってみろ」

「西の京の四条猪熊に、太政官の小史で石麻呂というのがいます」

「うん」

「つい昨夜のこと、公事で遅うなつて中の御門から内裏を退出し、車に乗って、東の大宮通りを下つて行つたと思ひ召せ」

「うむ」

「石麻呂は目から鼻にぬけるような小氣のきいた男でござるによつて、近頃、京中がしきりに物騒であるので、その用心をいたしました。車中で装束を全部ぬいで、おりたみ、車の畳の下にしき、冠としたうず（足袋）ばかりの裸となつていましたところ、二条から西へ車を向け、美福門にさしかかる頃、あんのじょう、月の光の中にぬす人共がはらはらと立ちあらわれたと思ひ召せ」

「うむ、うむ」

「一人は車の轅をおさえ一人は牛飼童をなぐりつけましたので、童は牛をすてて逃げ去りました。車のうしろには雑色が数人いたのでござりますが、これまた盗人共が刀をふりかざしておどかしますと、わっ！ とさけんで逃げ去つ

たと思ひ召せ」

「よし、よし、たしかに思ひ召してやるぞ」

「盗人共は皆集り、車のすだれを引き開けてみましたところ、赤裸に冠だけかぶつた男が、笏をかまえ、うやうやしくすわっているのが、さし入る月光の中に見えたのでござります」

「ハハハ、おもしろいな。それから？」

「これはどうしたわけじやい、と、ぬす人どもがおどろきあきれながら、言うたと思ひ召せ」

「うむ、うむ」

「小史は笏をささげ、上役衆にもの申上げるように拝をして、東の大宮で、ご同職衆にとめられ、早や引きはがれてしもうたのでござる。せつかくのところに、まことにお氣の毒。ぬす人共は、ドッと笑つて、そのまま立去りましたげな」

「ハハハ、ハハハ、ハハハ」

純友の笑いは、いかにもおもしろげで、くつたくなげで、明るい河原に高々とひびきひろがった。

それに力を得たのであらう、乞食の話しぶりは熱を帯びて来る。

「小史は盗人共の遠くへ行つてしまったのを聞きまして、やよ、やよ、皆まいれ、もう大事なやよ」と呼ばわりますと、牛飼童も、雑色男共もかくれていた物かげから出てまいりましたので、供ぞろいを立てなおし、立ちかえり

ました由。まことに、盗人の上越すはしこい心と、河原の者共、皆おどろいています」

「やれ、おもしろかった。ついでのことに、もう一つ思召してやろう。その盗賊共の中の一人に、汝もいたと、まろは思召しているぞ！」

「めっそうもない！」

「そらよ！ おもしろい話を聞かせてくれたにより、ほうび」

中国銭を数枚、河原の石ころの中にちゃらちゃらと落して、歩き出してた。

乞食から聞いた話は、おもしろかった。純友は冠と、したう、だけの裸の男が笏をかまえて、うやうやしく拝をしなから応答する姿を思い描いて、クックツと笑い、太政官の小史石麻呂というたな、いつか逢うてみよう、つぶやきながら、東ノ洞院高辻の屋敷にかえった。

この邸宅は、元来は公家の邸なのだが、当主が国の守となつて、北陸の方に行き、のこされた女だけの家族には、こんな広い家はいらないので、家族らは東の対の屋に住み、あとを彼に貸しているのであった。

純友は寝殿の廂の間を居間にしている。そこで、明るく、広い庭を眺めながら、飯を食った。

銀の鉢に飯を盛り、湯漬にして、干魚と瓜の漬物をおかずにして、食べた。うまかった。銀の箸と鉢とがふれ

て、すずしげな音を立てるので、一層すすんで、五膳もかきこんだ。女は腹をへらすものである。

十分に食べ、大いに満足していると、郎党の金剛がまかり出て、隅っこにうずくまった。これも何かと世間のめずらしい話を聞きあつて来ては報告するように、言いふくめてある男だ。

「何ぞありそうだの」

「へえ」

金剛といういかめしい名にふさわしくない。やさしく、おとなしやかな、色白の顔立ちの、三十男だ。

「ございます。ございます」

といいながら、板じきをいざり寄つて来た。

「語れ」

脇息にもたれ、楊子づかいしながら、聞く姿勢となつた。

「五条河原に集っていた傀儡子共が、昨日から東の市の前の広場におし出し、奇妙なことをはじめました」

五条の河原に傀儡子の群れが集つて、衣冠した男神、金冠をひたいにあてて礼装した女神の小さな像を祭り、その前で傀儡子衆を奏して、祭事を行い、京中の崇敬を集めてにぎわっているのは、この夏、純友が一年ぶりに国から上京した時には、もうはじまっていた。

その頃までは、にぎわうと言っても、それほどことはなかったが、その後二月ほどの間に、日を追つて大盛況と

なり、人々は季節の野菜やくだものや、魚鳥や、さては高価な織物や財宝まで、おしまず神前に陳列寄進して、半狂乱のていになりつつあるのだ。

「奇妙なこととはどうなのだ？」

「あの男神像、女神像が、それぞれに性器をそなえていることを、殿はご承知でありましょうか」

「見たことはないが、そのように聞いてはいる。まざまざしい色どりまでしてあるそうじゃな。アハハ、しかし、それがどうしたのだ」

「傀儡子共は東の市の前におし出し、一層大きな祭壇をもうけ、一段と美々しくかざり立てをし、男神と女神にまぐわいの様を演じさせ、それを『とこ世の契り』と申して、一紙、半銭でも奉獻して礼拝すれば、災厄即滅、七福即生の利益があると説き立てているのであります」

「やあ、そりやおもしろい。これはぜひ見たい。すぐ行くう。供せ」

立上った。

東の市は、今の西本願寺のある地点にあった。東ノ洞院高辻からそう遠いところではない。すぐついた。

市の前の広場は喧騒をきわめ、日和つづきで乾ききつて、ほこりが濛々と立てこめて、よほど近づいても、何がそこで行われているかわからないほどであったが、突如、そこから、

「喧嘩だ！ 喧嘩だ！ 喧嘩だ！……」

という声のはじけ上った。

### 傀儡子記

市場の前の広場は、百二、三十メートル四方くらいはあるが、その西北方の隅が雑踏と喧騒の渦巻になっている。名状しがたい雑踏、名状しがたい喧騒とより、言いようがない。そこには濛々たる砂埃が濃い煙のように舞立ち、濃い霧のように立てこめ、少し離れると、そこで何が行われているか、ほとんど見えない。やや近づいて、その埃の中に入ると、いくらか見える。煮え立っている鼎の中で、下から炊き上げられる火勢によって、野菜や肉の切りみがぐらぐらと沸騰して、たえず下から上へ、上から下へと循環するように、人の群れが埃の中で遠ざかったり、近づいたりして、隠顕するのである。喧騒はその隠顕と遠近とに副っている。人のさけびがあり、会話の切れはしがあり、祈りのことばがあり、感嘆があり、笑いがあり、唄声があり、笙・ひちりき・笛・太鼓・羯鼓・銅鑼・百済琴（ハーブ）等の器楽の音があり、それが一緒になっているので、耳も聳るような狂躁的な雑音となり、ただ、ワッワ、ワッワとばかりに、鼓膜を乱打しつづけるのである。

その狂躁の中に、一むら濃く見えて、黒雲かなんぞが渦巻いているようなものがある。そこが喧嘩の行われていると

ころであろう、その周へんからしきりに「喧嘩だ、喧嘩だ」というさけびがおこり、そこを目がけて人々が駆け集りつつある。

「来い！」

と、供の金剛と栗丸にさけんで、純友もそこへ急いだが、ようやく一人一人の姿がはっきりと見えて来る頃、かたまっていた渦巻がバツとはじけたかと思うと、石ころかなんぞがはじけ飛んだようであった。そこから、一人、二人、三人と、次々に飛出して、あつという間もなく、広場を飛んで行ってしまった。最後のやつは純友のついそばをかすめて飛びすぎた。顔のどこやらをたたきわられたのであろうか、鼻血を出さされたのであろうか、半面を血に染め、肩から胸のあたりに血をしたたらせて、おそろしい姿になっていた。

「ずいぶん手あらく痛めつけられているのう」

純友はにやにやと笑いながら、見送った。

こんなわけで、純友がそこに到着した時には、渦巻く黒雲は求心力を失って、ほぐれはじめて、もやもやとしたものになりつつあった。しかし、それでも、人々の目は、一人の男に集中していた。

それは、喧嘩の相手だった男にちがいない。着ている冠がゆがみ、濃い緑の狩衣かりぎしが着くずれている。

われわれは西部劇で、フロックコートにシルクハットをかぶった紳士が、その服装にふさわしくない労働や、格闘

や、戦闘や——たとえば車陣をつくってインディアンインディアンの襲撃に対抗して射撃している時でも、シルクハットを脱ぬこうとせず、どうかしたはずみに落っこちればすぐひろい上げにかぶるのを見る。そして、「邪魔だろうに。戦闘がすむまで脱いでいれば、ずいぶん働きやすかるうに」と、思わずにはいられないのだが、どうやら西部開拓時代の紳士諸君にとつては、帽子は屋外においては長時間はぜつたに脱いではならんものということになっていたらしく思われるのである。常時に冠をかぶる習慣のあった日本でも、そうであった。冠なしでいることは、「はなちもどどり」といって、大へん無礼なことにされたのだ。この時代の日本人は、西部劇時代の紳士より、まだきびしい。西部劇時代の紳士のたしなみは屋外においてだけであったが、昔の日本人は、家の内外を問わず、夜昼を問わない。つまり、夜寝た時も冠を脱いではいけなかったのである。もつとも寝相が悪くて、ぬけてしまうのは、やむを得ない。

こういう次第であるから、その男も先ずぬげかかっている冠をかぶりなおし、次に着くずれた狩衣を正したが、これは右の袖つけのあたりが大きくほころびたらしく、うまくとのわない。男は大いに気にして——皆が驚嘆の視線をあつめているので、一層体裁ていさい悪く思うよううで、黒ひげいかめしい供の者をうながし、大きくたくましいからだをすくめるようにして、向うへ行ってしまった。こそそした動作は、雄偉ゆうゐといってもよいその堂々たるからだつきや、

雄々しい面がまえに似合わないものであった。

見送っている純友の目の前で、その男と供の者の姿は、埃の雲の中に閉ざされてしまった。

「あの面だましは、坂東じゃわ。ことばはよく聞きとれなんだが、坂東声であつたような氣もする」

純友は小さくつぶやいたが、ふと栗丸をかえりみて、

「栗丸、われはその太刀を金剛にわたし、今の男のあとをつけ、行く先をつきとめい」

と、命じた。

「へい」

栗丸は、太刀を金剛にわたし、赤い鼠のようにほこりの中に消えた。

傀儡子が日本の歴史にあらわれたのは、いつであろう。

ある学者の説では、万葉集に「さぶるこ」とあるのが、それであるというが、これは通説というほどにはなっていない。次は扶桑略記にちょうどこの小説の時代のこととして、この小説で今作者が描写しつつある情景をもって、男女の両神を祀り、卑猥な動作を演じさせ、一般庶民の熱狂的な崇敬を得た一団のあることを記載しているが、この一団が傀儡子であつたことは疑いない。傀儡子ということばは出て来ないが、古来の学者は皆傀儡子と断定して疑わないのである。

次はこの時代から四、五十年後に大江匡房が「傀儡子

記」なる漢文体の文章を書きのこしている。匡房は当時の大学者であり、ずいぶん精密に書きのこしているので、当時の傀儡子の生態がよほどに明らかになった。

その記述の要領はこうだ。

クグツは定住地なき流浪の民である。テント生活をして、移住して歩くところは、中国北方の蛮族の風俗によく似ている。彼らの男は弓馬が達者で、狩猟を事としているが、このほかに生計の法としては奇術を演ずる。その奇術は、一は弄劍。双劍からついに七、八ふりの劍を手玉にとる。二は人形まわし。木でこしらえた人形を舞わし、そのたくみなこと生けるがごとく、さまざまな態を演ずる。その三は目くらましの術。石ころを変じて金銭となし、草木を化して鳥獸となして、人目をくらます。

女は美しく紅粉をほどこし、品よく歩き、媚びた笑顔をにつくり、エロチックなやり唄をうたい、男に媚びてしなだれかかるが、父母も夫も知りつつも少しも禁制せず、しばしば行きずりの人の枕席に侍しても、嫌う様子なく許しておく。このような売笑行為によって得たもので、錦繡の服、錦衣、黄金のかんざし、玉をちりばめた匣などをとりそろえ、不足なものはない。

こんな生態であるから、クグツは一畝の田を耕すこともなく、一枝の桑を摘むこともない。つまり、地方の役人の支配を受けないのである。彼らは百姓でないのである。彼らは浮浪の民をもって自任している。それ故に、上は天

子や朝廷は自分らに何のかかわるところなしとし、下は地方官の存在を恐れず、租税やかかりものや労役のないのもって、一生の楽しみとしている。

彼らは夜になると百神（コザトヘンをつけて、陌神とすべきである。陌神は巷の神、つまり道祖神である）を祭り、夜ッびて、狂躁的な音楽を奏し、おどりまくりつつ、福佑をもとめる。

彼らは定住地なしとはいえ、彼らのうち東国筋の美濃・参河・遠江等から出たものが最も高級であり、山陽道の播磨、山陰の但馬等から出たのがこれにつき、西海道（九州）出身の者を最下とする云々。

と、まずこんな風に記述している。

この次の時代の書物としては、平安末期から鎌倉初期にかけて編纂されたと考えられている今昔物語に、一つだけクグツに関する話が出ている。クグツ出身でありながら、算法・書筆のわざに通じた男があり、素姓をかくして、ある国の守に奉公して、重く用いられていた。クグツの集団がこの男がクグツ出身であることを看破し、いたずらをくわだてた。平安朝時代、鎌倉時代を通じて、遊女や遊芸の徒は、身分高い旦那衆のところへは、呼ばれて行く以外に、おしかけて行くこともあり、それを無礼とがめはしない習慣があった。平家物語に時めく平清盛のところへ仏御前がおしかけて行くくだりがあるが、そこへもそう書いてあ

る。クグツ共は、この風習を利用して、国の守の館へおしかけ推参をして、音楽をかなでた。

すると、しかつめらしい顔をして、守のわきで事務を取っていた書記がふるえ出した。クグツ共が、いよいよ節おもしろく奏でると、書記はますますふるえ出し、ついには筆を投げすて、音楽にあわせておどり出したので、その素姓がばれたという話。

この説話は、クグツにはクグツなかまだけにわかるある特徴があることと、彼らは音楽的種族で、音楽にたいしては強い種族的郷愁があることを語っている。

その次の時代では、鎌倉末期から南北朝初期にかけて編纂された「十訓抄」に、クグツの女の杜騙談が出ている。

この十訓抄に出て来る頃は、クグツは集団をなしてはいるが、もう大集団ではなく、せいぜい二、三十人の集団のようである。これ以後、もう記録にはあらわれない。衰退期に入ったのであらうと思われる。

衰退期に入ったからとて、減少、死滅したとは考えられない。それでは、どうなったのであらうか。

以下、述べるところは、ぼくの見当だけのことである。研究というほどの過程を経ているわけではない。

一部は定住民化して、そのうちのあるものは、摂津や淡路や阿波に定住して、人形つかいになった。文楽の人形芝居、淡路人形、阿波人形等はその流れである。人形芝居の人々が西宮の蛭子神社の境内にある百大夫と称する神を信

仰するのは、「傀儡子記」にある「百神（道祖神）」信仰にあたる。

道祖神信仰は、陽物信仰とも結びついて、しばしばその形をとり、金精神、陰陽石の信仰などの形をとり、色町の人々に信仰されることが多いが、クグツ女がその昔売色を本業としていたことと思いきらべて、大いに興味がある。

定住した者の一部は、諸方の神社や寺院付属の奴隷となつた。その奴隷らが田楽や申楽を創造し、これらが昇華されて能楽となつた。

また、この定住した者共のうち、江州の甲賀や伊賀あたりに居つた者は、クグツ時代から持ち伝えた目くらましの術を変化させて、忍術と言われるものとした。つまり、そのはじめはお客さん相手の奇術であつたものを、窃盗術、隠身術にかえて行つたのであらうという多くの想像なのである。

証拠というほどのものはないが、傍証めいたものはある。能楽の総本家は観世氏であるが、観世氏の本姓は服部氏であるという。服部姓は伊賀に最も多く、服部半蔵が徳川幕府の伊賀衆の組頭であつたことは誰も知つてゐることである。徳川二代の將軍秀忠の生母の父は伊賀の者で、服部某といい、はじめ能楽師として徳川家に召抱えられ、後に忍びの者として奉公したというのである。能楽と忍術との親近関係を語る話といえないであらうか。

昔ながらに流浪生活をつづける者もあつて、それは現代

に至つて山窩といわれる者となつた。

多くのこの説に、反対する人もある。その人々は、クグツのテントの張りようや山窩のそれとは違ふ、クグツのは、傀儡子記に「穹廬氍毹」とあつて、丸形の屋根であり、テントの質も毛織ものであつたはずであるが、山窩のテントは木綿や麻で、形も一枚の板をななめにのべたように張る、こうまで違つては山窩がクグツの末流であるとは言えないと主張する。

しかし、多くは匡房のこの文章を文字通りに信用するのがどうかしていると思う。この文章全体が、当時の日本の学者の習慣で、ことさらにむずかしい文字使いをして、文飾沢山に仕上げてゐる。割引して解釈しなければ、かえつて真相を失うであらう。原文で、「穹廬氍毹、逐水草以移徙、頗類北狄之俗」となつてゐるのも、「テント生活をしながら、生活の資をもとめて次から次へと移動して歩くところ、中国北方の蛮族の生息に実に似てゐる」くらいに解釈すべきで、穹廬とあるから円屋根張りであるべきであり、氍毹とあるから毛織物でなければならんと解すべきではないと思う。かりにそこはそう解しても、次の「水草を逐うて以て移徙す」は解釈がつくまい。水草を逐うて移動するのは、牧畜のためだが、この文章の中にはクグツが牧畜民らしい生息を持つていたという記述は全然ない。単に「生活のために転々と移動する」くらいにしか解釈出来ないのだ。こちらが大ザッパな解釈でなければならぬ以

上、穹廬氈帳も単にテントの意に解してよい道理である。ともあれ、ぼくは山窩はクグツの末流であると感じている。山窩も、戦前には相当な集団をなして、日本全国を流浪して歩いていったものであるが、この戦争中から、恐らく米の配給制度のためであろう、全部居つきになって、良民の間にとけこんでしまった。

ぼくらの少年時代、山窩は村々をへめぐり、箒や竹籠などの修理を請負ったり、川魚やスッポンなどを捕えて売ったりして、生を営んでいるものであった。竹細工は別として、川魚の漁撈は、傀儡子記の「狩狼を以て事となす」の狩狼の中にふくまれるものであろう。

友人中沢聖夫君は、「木地屋」もクグツの末流であろうと言っている。彼の所説の要領はこうだ。クグツが太鼓、羯鼓等の円形打楽器を持っていた以上、彼らはロクロを持ち、その使用法を知っていたはずである。今日のように必要なものは造作なく他から買えるという経済の時代ではなく、必要なものは自らつくることを普通としていたのだから。そのロクロ技術をもって、皿、碗、盆等の木地を造るようになったのだらう云々。

これも見当だけの説ではあるが、てんから否定し去るべきではなく、一応も二応も考察すべき説であらう。

それでは、クグツとは、そのはじめは一体なんであらうか。その生態が似ているように、西洋のジブシーと根源を一つにしたもので、西に行ったのがジブシーとなり、東に

来たものがクグツになったという人もある。あるいはそうかも知れない。クグツ唄にある「トウトウ、タラリ、トウタラリ云々」は、チベット語の讃歌であるとは、現代のチベット語学者の通説であり、ジブシーも、チベットか印度地方をその発祥の地にしているらしいと言われているのだから。

ともあれ、外来民族であったには相違ない。今日、宮内庁雅楽寮に伝承されている雅楽には、朝鮮楽、中国楽、安南楽、西域楽等、さまざまなものがある。これはその音楽を持って来たそれらの国の楽人を当時の朝廷が皆任用摂取したことを語る。クグツはこれらの人々によって朝廷が飽和状態に達した以後に渡来したので、もう任用されず、といって普通の生産を営んで良民となることもいや、といふところから、雑戸として流浪の民となったものと、ぼくは解釈している。

### 坂東の住人

純友は、クグツ共がまだ五条の河原に屯集している頃、見物に行ったことがある。その頃も大分繁昌ではあったが、これほどのことはない。

「はてさて、物事はやはりはじめるとなると、とめどを知らんものじゃわ」